

第9回「市長と語るタウンミーティング」を開催しました

1 日 時 令和6年4月4日(木曜日) 午後3時～

2 場 所 市役所4階 特別応接室

3 参加者

藤田 諭史 様

藤田 真樹 様

森江 正男 様

島田 満沖 様

市川 真由美 様

緑川 雄司 様

計6名

4 会議の概要

【テーマ】未来に生き残る善通寺の農業

1. 開 会

2. 主催者挨拶

3. 参加者紹介

4. 農業施策について 概略説明

5. タウンミーティング

6. 閉会

5 いただいたご意見

発言者	ご意見
【テーマ】 善通寺の農業が未来に生き残っていくための課題は何か	
藤田 諭史 様	<ul style="list-style-type: none"> ・跡継ぎが一番の課題。他の都市からきて農家として定住してくれる方もいるが、やはり少数。善通寺の農業が生き残っていくためには、親元就農を増やすのが肝心。そのためには、新規就農者の支援だけではなく、親元就農者に対しても補助金等が必要。現状では将来的な不安から親元就農者はなかなか増えないのではないかと。 ・肥料、水利費、機械代などで米の栽培には多額の費用がかかっている。米価が上がれなければ米を作ろうと思う農家はなくなる。米価が上がることが肝心。また、研修なども現在は 1 町 2 町あるような大規模な農業のところに行っているが、善通寺市と同規模のところに行き研修に行った方が学べることも多いのではないかと。
藤田 真樹 様	<ul style="list-style-type: none"> ・周りの友人に農業を勧めても、重労働であるとか収入面の不安であるとかから芳しい応えはない。生活と直結する収入面の不安が農業をするうえで大きな障壁となっている。そのためには新規就農者だけではなく、従来からの農業従事者についても支援があれば良いと思う。
森江 正男 様	<ul style="list-style-type: none"> ・息子が農業を継いでくれているが、農業者大学で学ぶ中で全国の様々な農業従事者の仲間ができ、刺激をもらっている。そのような繋がりも大切。 ・現在、何をするにも認定農家でないとできないことが多い。認定農家になるには青色申告をして経営をはっきりさせなければならない。それだけの所得を上げるのもかなり苦労する。 ・農業委員会や土地改良区の職員は最低でも 3 年はいてほしい。職員が頻繁に変わるのは困る。 ・社会のレベルが上がって週休 2 日が当たり前、趣味も大事と言われる現代において、年中無休に近い農業を職業として選択する人は少ないのではないかと。

発言者	ご意見
島田 満沖 様	<ul style="list-style-type: none"> ・市の職員は、たとえば農林課に在職中の時は農業について勉強していても他の課に異動すると農業のことが分からなくなる。そこが縦割り行政の大きな歪みである。農業を問わず食は人間の大きな関心事であるので、食をテーマとした運営協議会等の課を超えた組織を作れば良いのではないか。食に関する運営協議会等で各異業種の意見を取り入れて農業の基本対策に落とし込んでいけば良いのではないか。 ・米麦は収穫が1割減少すると値段が倍になり、2割減少すると暴動が起きると言われている。現在地球規模の異常気象であり、またいつ紛争が起こるか分からない。そのような中で普通寺市であれば食は安定しており、安全であると言えるようにすることで住みやすいまちになるのではないか。 ・単純に所得が上がれば農業をするというものではない。今の若い人は休みを大事にするのでそこも農業をやるうえでネックになる。
市川 真由美 様	<ul style="list-style-type: none"> ・現在天候不順などで畝が上手く立たないことが多い。また、他の方の土地も借りて農業をしているが、親から引き継いだ土地と違って暗渠もなく、水はけが悪いため後回しで使う状態になっている。暗渠の補助など、基盤整備に関する補助を設けてほしい。 ・人手不足のため、外国人を雇っているが受入機関に支払うお金などもあり、最低賃金より高い賃金で雇っている状態である。今後ますます賃金高騰が予想される中で、利益が出るのか心配。
緑川 雄司 様	<ul style="list-style-type: none"> ・今年で農業を始めて7年目になるが、最初の5年間は青年等就農資金があった。6年目から無くなり、農業収入だけで生活していくとなったとき不安を感じた。継続して10年、20年と長いスパンでの支援があれば安心して農業ができるのではないか。 ・県外から移住してきて農業を始めたが、農業を始める際に困ったのが、作業場や納屋付きの物件などの情報が少ないこと。空き家バンク等も確認していたが、更新が少なくほとんど情報を得られなかった。地縁が無い人が普通寺で農業を行ううえでこの点はネックになる。農作業が出来る作業場の情報がスマートに探せるような基盤作りも大切であると思う。

発言者	ご意見
【テーマ】 これからの農業について～スマート農業、ブランディング、6次産業化など～	
島田 満沖 様	<ul style="list-style-type: none"> ・ブランドというのは、野菜においては鮮度、果物においては美味しさという商品力をキープし販売することであると考えている。このキープをすることが難しい。台風、干ばつなどの被害が10年に1度くらいはあるが、そのような時はブランド名では商品を出さない。出来の良くないものを出荷してしまうとたちまちブランドに傷がついてしまう。手抜きをしないということがブランド化に繋がる大きな一因と考えるが、複数人が絡んでくると考え方の違いもあり難しくなることもある。 ・ビワを営利目的で栽培している国は現在、台湾、日本、スペインだけ。生産数は少ないが、今後缶詰関係で売り出していけば欧米では相当な単価で売れるのではないか。田中ビワという果肉は固いが缶詰に加工しやすい品種があるので、これの生産に取り組むのも良いのではないか。 ・農業を始めた時（約45年前）から日報を付けているが、その時の善通寺の気温と雨量は現在の福島県いわき市と同じである。温暖化の影響で今まで作れなかった作物が東北などでも作れるようになってきている（キウイなど）。産地間競争やグローバル競争を見据えて作るべき作物を考えなければ、5年後10年後に困難に直面するようになる。
市川 真由美 様	<ul style="list-style-type: none"> ・善通寺市はコーンの栽培が盛んなのでダイシモチムギのように、コーンを使ったパンなどの商品開発をしても良いのではないか。 ・野菜のブランド化は難しいと考えている。ブロッコリーもその時期その時期で品種が変わるし、JAの推している品種も変わる。市をあげて推してくれて高く売れるという品種があれば、みんなその品種を作るだろう。

発言者	ご意見
藤田 真樹 様	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの世代はスマートフォンに馴染みが深いので、スマートフォンで状況を見れるなどの技術があれば農業に興味を持ってくれるのではないか。自動運転農機や収穫ロボットなどによって自動化が出来れば便利ではあるが、導入コストが大きいことがネック。
森江 正男 様	<ul style="list-style-type: none"> ・米麦である程度の面積を行うとすると作ることを専門にし、売る方は農協に任せるのが妥当。自分で売買している友人もいるが、購入者の3分の1は継続購入しないので、3分の1は新規開拓しないといけないとのことである。米麦の栽培をしつつも購入者を開拓していくのは難しいと考える。
藤田 諭史 様	<ul style="list-style-type: none"> ・ブロッコリーなどの県でのブランド化はともかく、市独自のブランド化は難しい。購入者としては、年間100なら100は必ず欲しいとなり、その数を絶対に確保することが必要であるが、善通寺市では品質込みでそれを行うのは厳しいのではないかと。
緑川 雄司 様	<ul style="list-style-type: none"> ・市のふるさと納税でも好調なアスパラガス（さぬきのめざめ）について、興味もある人も多いが、最初の設備投資費が大きいので参入するにはハードルが高い。 ・農業は人気がないというが、実際周りには農業に興味がある人も多い。そのような本気で農業をやりたい人にアピールしていけるような、PR動画など、インターネットの検索で引っかかるようなアピールをしていけば良いのではないかと。